

「霧の中の宝物」

ミヤシタケンサク

【登場人物】

○神室 美悠..みゆ（27）

男勝りで勝気な女性。

粗暴だが、心根は

優しい。

姉の美青とは

幼い頃から仲が良く、

姉の願いを叶える為に

四国から横浜へ

やってくる。

○神室 美青..みお（29）

美悠の姉。

生き別れた息子の

日向に一目会うべく

美悠の運転する車で

実家の四国から

横浜へやってきた。

○石川 十和子（59）

美青の元旦那・祥吾の母。

元嫁の美青、しいては

美悠も敵視している。

○石川 環（26）

美青の夫であった

祥吾と結婚し

石川家に嫁いだ女性。

○石川 日向…ひなた（7）

美青の生き別れた息子。

聡明で礼儀正しい。

○中年男

○警官①

○警官②

○中年女性

○親子連れ

S 1 横浜 蕎麦『角平』外観

店員の声「お待たせしましたあ」

S 2 同 店内

特製の手もみ蕎麦が

熱々のつけ汁、豪快な

海老天と共にテーブルに

提供される。

それを見て息を呑む

神室 美悠。

美 悠「美味そっ！これが

『つけ天』かあ」

美悠の向かいに座る

姉の神室 美青。

少しやつれているが

美しい笑みを妹に向ける。

美 青「早く食べてみて。美味しいよ」

海老天にかぶりつく美悠。

美 悠「！美味っ！！」

立て続けに、つけ汁に

浸けた蕎麦を豪快に啜る。

美 悠「最高！」

美 青「(笑って)」

美青はスマホで

目の前の蕎麦を写メする。

美 悠「(見て)」

カメラを割り箸に

持ち替え、蕎麦を

啜る美青。

美 青「・・・ねえ、後

どの位かな？」

美 悠「1時間くらいって姉ちゃんが

さっき言ったじゃん」

美 青「そっか」

蕎麦を食べる美青。

美 悠「・・・」

年季の入った

『愛媛ナンバー』の

ミニバンにやってくると、
運転席を開ける美悠。

美悠「ああ美味かった。じゃ、行こ」

美青「美悠」

美悠「ん？」

ミニバンの屋根の向こう、
助手席側の美青に
目を向ける美悠。

美青「寄りたいトコがあるんだけど」

美悠「？」

S 4 横浜みなとみらいコスモワールド

大きな観覧車を見上げ、
呆ける美悠。

美悠「・・・100メートル以上

あんじゃないの？」

美青「(笑って)」

通りがかりの女性に

目をやる美青。

美青「すみません」

女性「はい？」

美青「写真、撮って頂けますか？」

女性「いいですよ(笑)」

美青からスマホを

預かる女性。

美青は美悠と観覧車を

バックに横並びで立つ。

女性「じゃあ、いきますよ。

はい、チーズ」

笑顔の姉妹にシャッター

が切られる。

美青「ありがとうございました」

女性はスマホを

美青に返す。

女性「あなた達、姉妹？

旅行ですか？」

美 青「ええ、愛媛の松山から

きました」

女 性「そう」

美 青「私は、以前逗子に

住んでたんですけど」

女 性「まあ、知り合いにでも

会いに行くのかしら？」

美 青「まあ……」

美 悠「……」

少年の声「ママ！」

美悠達の向こう、女性に

大きく手を振っている

少年と男性がいる。

女 性「じゃあ、気を付けて」

姉妹の前から去ると

父子と合流する女性。

美 青「(見て)」

少年が女性に、

カーネーションを

渡している。

美 青「（寂しそうに）……………」

美 悠「（姉を見て）……………」

今日、『母の日』だったね。

忘れてた」

美 青がおもむろに

笑顔を妹に向けると

観覧車を指差す。

美 青「ねえ。一緒に乗ろ？」

美 悠「は？乗らない乗らない！

姉ちゃん、アタシ高いトコ

無理なの知ってんじゃん！」

美 青「いいじゃない。

あんたと最後の、えくと、

何だっけ？最後の……………」

美 悠「デートだよ」

美 青「（思い出し）そう、デートに

なるかも、なんだから」

美 悠「……………」

懐かしそうに横浜の景色

を眺め、スマホで

写メする美青。

目の前に座る美悠は、

ガチガチに固まっている。

美 青「(笑って) 美悠も景色

見なよ。キレイだからさ」

美 悠「む、無理無理無理・・・

そんな余裕ないって。

ていうか、急に観覧車って何？

意味わかんないんだけど」

美 青「あの子と何回か来て、

この観覧車乗ったの。」

あの子、凄く楽しそうで」

美 悠「・・・」

美悠に手招きする美青。

美 青「こっち来て。一緒に撮ろ」

美 悠「見て分かんない？

アタシ、動けないから！」

いたずらっぽく

微笑むと、美悠の隣に

移動する美青。

美 悠「わっ。動かないでよ！

揺れるじゃん！！」

怯える美悠と再び

2 S 写真を撮る美青。

S 6 赤レンガ倉庫

並んで歩く姉妹。

美 悠「レトロお洒落だね〜。

ここも日向連れてきた事

あんの？」

美 青「うん。あの子連れて初めて

遠出したのがココ」

シャツターを切る美青。

美 悠「(笑って)」

S 7 同 中 レストランフロア

多くの客で賑わう中、
スマホを耳に当てている

美悠。

美 悠「あ。母ちゃん？

うん、さつき横浜

着いた・・・うん、大丈夫」

少し離れた場所に立つ

美青に目をやり乍ら

電話する美悠。

美 悠「・・・心配しないで。

姉ちゃんもアタシらも

苦しむ時期は過ぎたじゃん？」

明るく務め、母の声に

耳を傾ける美悠。

美 悠「・・・だから、四国から

車でなんて無茶してるのは

分かってるって。

けど、姉ちゃんの希望、

叶えてあげたいんだ。

姉ちゃんが忘れちゃう前に。

・・・うん。じゃあ、帰る時

また連絡する」

通話を切った美悠が

再び美青に

目をやるが・・・

その姿がない！

美 悠「！姉ちゃん？」

慌てて駆け出す美悠。

美 悠「姉ちゃん！」

ついさっきまで美青が

いた場所で辺りを

見回す美悠。

美 悠「姉ちゃん！！」

S
8 同 アップルパイ専門店

『GRANNYSMITH』

ガラスケースを

覗き込んで微笑む美青。

そこへ駆けてくる美悠。

美悠「姉ちゃん！」

美青「？」

美悠を見て、困惑する

美青。

美悠「（息を呑み）……」

美青「（気づいて）ああ、美悠」

安堵の息を漏らす美悠。

美悠「……急ごう、姉ちゃん」

美青の手を握る美悠。

美青「待って」

美悠「？」

再びガラスケースを

覗き込む美悠。

その視線の先には、

綺麗なアップルパイ。

S
9 金港ジャンクション

マフラーから黒煙を

吹き出しながら

走るミニバン。

S
1
0 走るミニバン 車内

後部座席に置かれた

アップルパイの箱。

美 悠「どうだった？久しぶりの

横浜は？」

運転しながら

アップルパイを頬張る

美悠。

美 悠「美味っ！コレ」

美青もアップルパイを

齧り微笑む。

美 青「どうって、変わりないよ。

あんたはどうだった？

初めての横浜は」

美 悠「まあ、観覧車以外は

いいトコだね」

美 青「（笑って）ところで、
お昼ごはんどうする？」

美 悠「さっき、美味しい蕎麦
食べたじゃん」

美 青「そうだったけ？」

美 悠「そうだよ」

優しく笑う美悠。

S 1 1 逗子 I C 出口

ミニバンが走り抜ける。

S 1 2 逗子市内 海沿いの道

走るミニバン。

美悠の声「もうすぐだよ。」

しかし、長い事走ったなあ」

美青の声「昨夜（ゆうべ）出て、
どの位走った？」

S 1 3 ミニバン車内

美 悠 「10時間は超えてるね」

美 青 「そんなに？嘘でしょ？」

真剣に驚いている美青。

美 悠 「嘘じゃないって」

不安な表情になる美青。

美 悠 「・・・」

美 青 「(何かに気づき)止めて」

美 悠 「？」

S 1 4 土産物屋 前→店内

魚や海の生き物を

モチーフにした

グッズが陳列された

店前でミニバンが

停車する。

美 悠 「姉ちゃん、急がないと」

美 青 「ちよっと待ってね」

助手席のドアに手を

掛けるが

躊躇する美青。

それを見て、運転席を

降りると助手席に

回り込み、

開けてやる美悠。

美悠「ほら」

美青「ありがとう」

×

×

×

店内に入る姉妹。

と、何かに目を

留める美青。

美青「あった」

美悠「？」

美青が何かを手取る。

美青「(笑って)日向が好きなの」

美悠「(笑って)いいじゃん」

美青の手には

イルカのアクセサリ。

S 1 5 日向（美青の息子）の写真

日向の赤ん坊時代から

3歳頃までの

写真（美青との2S）が

カラージュ。

*日向は小さなイルカの

ぬいぐるみを

殆どの写真で抱いている。

美悠の声「もう、何年だっけ？」

美青の声「ん？あの子と

離れて・・・えくと」

美悠の声「確か、4年だよね」

美青の声「うん。4年だね」

美悠の声「てことは7歳か。

生意気になってん

じゃないの？」

美青の声「かもね（笑）」

S 1 6 ミニバン車内

スマホの画面、

日向の画像を

見ている美青。

美 悠「まだ見てんの？」

もうすぐ本物に会えるってのに」

美 青「そうだけど、怖くて」

美 悠「？」

美 青「だって、あの子は

私の事なんて絶対、

忘れてるもん」

美 悠「……」

美 青「……それに、私も

もうすぐ……」

美 悠「（遮る様に）大丈夫。

日向は姉ちゃんの事分かるって」

再びアップルパイを

頬張る美悠。

美 青「ちょっと、もう3つ目だよ？」

美 悠「心配しないで、日向の分は

ちゃんと残してるからさ」

美 青「・・・ごめんね。」

「こんな事につき合わせて」

美 悠「ん？気にしないでいいって。

無職は暇だからさ」

美 青「・・・私、あの子に

会えるだけでいい」

美 悠「・・・」

美 青「今までの事、日向や美悠、

お母さんの事とか、

何から何まで

分かんなくなっちゃう前に」

美 悠「・・・そんな事

言わないでいいって」

美 青「（微笑み）心配しないで。

覚悟は出来てるから」

美 悠「姉ちゃん・・・」

美 青「あなたやお母さんには

今まで散々迷惑かけちゃったね」

美 悠「・・・それ、ちゃんと

渡しなよ」

美青が手にするイルカの

アクセサリー

(が入った包み)に

目をやる美悠。

美 青「うん」

S 1 7 海沿いの道

アツプルパイ(4つめ)

を手に運転する美悠。

美青は窓から顔を出し、

吹き付ける潮の風に

顔を預ける。

美 青「(微笑んで)」

と、ミニバンが

急停車し美悠が

運転席から飛び出す。

美青「？」

四つん這いで

ゲエゲエ吐く美悠。

美青「大丈夫？」

降りてこようとする

美青を手で制する美悠。

美悠「平気。けど、やっぱ

食い過ぎた（笑）」

美青「・・・」

S 1 8 走るミニバン 車内

スマホを取り出す美青。

美悠「何すんの？」

美青「やっぱ、あの人に

言っておこうと思って」

美悠「電話する気？」

いいって、あんな男」

美青「でも、親権持ってるのは

向こうだし」

美 悠 「姉ちゃんを捨てたのは

あいつなんだよ？

しかも鬼ババの言いなりに
なって、あのマザコン男」

美 青 「（諭すように）美悠」

美 悠 「・・・言い過ぎた」

美 青 「私が悪いの。病気がちで

日向の面倒も満足に

見られなかったから。

あの子にとっては

こうするのが1番だと

思ったから。

だからいいの」

美 悠 「・・・」

美 青 「そういえば、日向と

どこで会うの？・・・お家？」

不安そうな表情を

浮かべる美青。

美 悠 「任せてよ」

ニンマリ笑う美悠。

美 青「？」

S 1 9 小学校 校門 傍

ミニバンが停車する。

S 2 0 ミニバン 車内

ギアを『P』に入れ、

サイドブレーキを

引く美悠。

美 悠「さて、到着。ここで日向を
捕まえよ」

美 青「・・・なんか誘拐犯みたい」

美 悠「何言ってるの？」

家なんか行ったらあの鬼ババが
出てくるじゃん。ここで日向に
会わなきゃ」

インパネの時計を

見る美青。

美青「でも、もう授業終わって
帰っちゃってるかも」

後部座席に置いた
鞆から双眼鏡を
取り出す美悠。

美青「何それ？」

美悠「偵察用（笑）」

運転席から勢いよく
飛び出し、校門に
向かう美悠。

美青「（見て）・・・」

フロントガラスの向こう、
美悠が双眼鏡で校舎を
じっくりと偵察すると、
勢いよくミニバンに
戻ってくる。

美悠「OK。まだ授業してる」

美青「う、うん」

緊張する美青。

美 悠「緊張しないでよ。」

アタシまで緊張しちゃうじゃん」

美 青「ごめん。そうだね」

美 悠がお腹に

さりげなく手をあてる。

美 青「(見て)・・・美悠」

美 悠「ん？」

美 青「あんた、妊娠してる？」

美 悠「・・・バレた？」

美 青「さっきのつわりでしょ？

甘いモノいっぱい食べて」

美 悠「・・・」

美 青「あの人の子供？」

苦い表情になる美悠。

美 青「産みなよ」

美 悠「！」

美 青「ね？」

美 悠「・・・あんな男の子供

なんて欲しくない」

美 青「じゃあ、墮ろすの？」

美 悠「・・・・・・・・」

乱暴にシートを後ろに
倒し、目を閉じる美悠。

美 青「自分から子供を

放棄しちゃダメだよ」

美 悠「・・・・・・・・」

美 青「私が言えた事

じゃないか・・・・・・・・」

美 悠「・・・・・・・・」

S 2 1 同 *時間経過

運転席で寝てしまつて

いる美悠。

美青はそんな妹の頭を

優しく撫でる。

美 青「(微笑んで)」

と、チャイムの音と共に

正門からランドセルを

背負った児童たちが

元気よく飛び出してくる。

美青「美悠。美悠！」

美悠を揺さぶる美青。

美悠「(ムニャ)？」

ハッと目覚め、

美青と共に

フロントガラスの

向こうに目を凝らす美悠。

美悠「姉ちゃんもしっかり見ててよ。

アタシも赤ん坊の頃の顔しか

覚えてないからさ」

美青「う、うん」

多くの児童たちが

立て続けに出てくる。

美悠「いた？」

美青「・・・分からない」

目を凝らす姉妹。

美青「あ！」

美悠「え！？」

美青が指さす先、

4人の男の子が

立ち話をしている。

美 悠「(見て)あの青いシャツ

着た子？あ！そうだ、

アレ日向だ！」

手作りのカーネーション

を手に、友達と楽しく

話している石川 日向。

美青の肩を押す美悠。

美 悠「さあ、行ってきなよ！」

美 青「で、でも・・・」

躊躇している美青。

友達と校門を後にする

日向の姿が見える。

美 悠「もう！今更ビビってんの！？」

何の為に10時間以上掛けて

来たのよ！？」

さっさと行きなっ！」

美 青「(頷き)わ、わかった」

運転席から身体を伸ばし、

助手席のドアを

開けてやる美悠。

と、それを妨げる様に

中年の制服警官が現れる。

制服警官「お宅ら、こんなトコで

何してんの？」

美悠「は？」

制服警官「免許証（見せて）」

美悠「はあ？？何で？」

制服警官「だから免許証」

美悠「はあ？？？」

だから何で？？」

美悠が目をやると

日向の背中が

遠ざかっていくのが

見える。

制服警官「先日も中年の男性による

子供への声掛けの事案が

あったんだよね」

美悠「はああああ！？」

怒りの表情で

運転席から降りると

制服警官に詰め寄る

美悠。

美悠「ちょっと、アタシらを

誘拐犯扱いしてんの！？

ていうか女だし、年も

まだ20代だったの！！」

制服警官「(遮り) いいから。

とにかく免許証」

美悠「出すかっ！！」

正門の前、多くの

小学生達が怯えた表情で

こちらを見ている。

美悠「・・・くっ」

S 2 2 激走するミニバン *時間経過

S 2 3 走るミニバン 車内

美 青「ちょっと、飛ばし過ぎだって」

美 悠「家帰られたらアウトだよ!？」

その前に捕まえなきゃ!!」

フロントガラスの向こう、

友達と歩く日向の背中が

見える!

美 悠「よしっ捉えた!

姉ちゃん、もうすぐだよ!」

美 青「(ドキドキ)」

フロントガラスの向こう、

友達と別れると角を

曲がって見えなくなる

日向の背中。

アクセルを踏み込む美悠。

次の瞬間、大きな炸裂音

と共に視界が激しく

揺れる。

美 悠「え?」

タイヤがバーストした
ミニバンがスピンする。

美青・美悠「きゃああああっ！」

激しいブレーキ音を

立て、停車するミニバン。

S
2
5 ミニバン 車内／外

美悠「うーん……。……。」。

姉ちゃん、大丈夫！？」

美青「うー、うん……。」。

ミニバンからヨロヨロと
降りる姉妹。

美悠「あちゃあ……。」。

このボロ車！」

タイヤに蹴りを入れると、

急いで後部座席から

アップルパイの箱を

取り出す美悠。

美 悠「行くよ！」

美 青「え？」

美青の手を取り、

駆け出す美悠。

そこへ、自転車に乗った

中年男が通りかかる。

中年男「おいおい、道の真ん中に

車置いてくなよ！」

S 26 道

早足で歩く美悠と美青。

美 青「車、ホントにいいの？」

美 悠「今はそれどこじゃないって。

それより先回り出来る近道とか

知らない？」

美 青「えくと・・・」

立ち止まり考えるが、

焦りと不安が表情に

現れる美青。

美 青「……えくと、えくと」

美 悠「早く！日向、家に

ついちゃうよ！」

ポロポロ涙が出てくる

美青。

美 悠「！」

美 青「……や、やっぱり怖い」

美 悠「……」

美 青「覚悟してたのに……

あの子に会えればいいって

覚悟してたのに……

やっぱり怖いよ」

美 悠「……」

美 青「今日も絶対、沢山迷惑

かけたよね？分かるの。

自分の脳細胞がどんどん

死んでくのが」

美 悠「……」

美 青「わ、忘れたくない！

忘れたくないよ！

だって、思い出は私の宝物

だもん！！失くしたくない！！

激しく泣き喚く美青を

強く抱き締める美悠。

美悠「大丈夫だから！姉ちゃん、

大丈夫だから！！」

美青「（泣いて）今日の事も、

美悠の事もきっと忘れちゃう。

けど、忘れたくない！

あの子の事も！！」

美悠にギュッと

抱き締められ、徐々に

落ち着きを戻す美青。

美悠「ごめん、姉ちゃん。

アタシ酷い事言った」

美青「・・・いいの。私もごめん」

首を横に振ると、

辺りを見回す美悠。

美悠「よし！アタシの勘は当たる」

自分に言い聞かせる様に

言うのと、美青の手を引き、
緑が生い茂った公園を
駆け抜けていく美悠。

S 2 7 大きな邸宅 傍

駆けてくる姉妹。

美 悠 「(息切れして) 着いた！」

嬉しそうに

潇洒な邸宅を指差す美悠。

不安そうにプレゼントの

包みを握り締める美青。

美 悠 「(祈る様に) 日向、

もう家の中とか

言わないでよね・・・」

美 青 「・・・」

と、前方に日向が

やってくるのが見える。

美 悠 「よし！姉ちゃん、来たよ！！」

美 青 「・・・日向」

日向をジッと見て、
微笑む美青。

美 悠「（笑って）ほら、行きなっ

が、身体が震えて

動けない美青。

美 悠「家、入っちゃうよ。

もう！アタシが連れてくる！」

美青を残し、

駆け出す美悠。

S
2
8
同 前

門扉を開ける日向に

美悠が駆け寄る。

美 悠「日向」

日 向「？」

美悠をジッと見つめる

日向。

美 悠「覚えてる？」

あなたのオバちゃんだよ」

日向「……オバちゃん？」

美悠「そ。久しぶりだね。」

これ、お土産。

横浜赤レンガのアップルパイ

と、アップルパイの箱を

差し出す美悠。

日向「……」

美悠「遠慮しないで。」

滅茶苦茶美味いんだ。

アタシなんて

4つ食べちゃったから（笑）」

日向に（半ば無理やり）

土産を持たせる美悠。

美悠「でさ、あんに

会って欲しい人がいるんだ」

日向「？」

背後を見やる美悠。

美青がジッとこちらを

見ている。

日向「……」

距離はあるがジッと

見合う母子。

日向の肩を抱く美悠。

美悠「さ。行こ」

そこへ、玄関の

向こうから若く綺麗な

女性が美悠達の前に

現れる。

女性「日向？お帰り」

美悠「？」

日向「ただいま。おかあさん」

美悠「……お、母さん？」

おかあさんと呼ばれた

石川 環が

怪訝な表情で美悠に

目をやる。

環「あの、どちら様ですか？」

美悠「あ。えくと……」

環「どういった御用で？」

美悠「……どういった御用って、

こういったり、そういったりな
御用で・・・」

更に玄関から老婦人の

石川 十和子が

出てくると、美悠を

見るなり眉を顰める。

十和子「（驚き）あなたはー」

美 悠「（アチャク）・・・どうも」

十和子「これ、あなたが日向に？」

日向が手にした

アップルパイの箱を

怪訝に見る十和子。

美 悠「まあ、ね」

日向からアップルパイの

箱を奪うと、美悠に

突き返す十和子。

美 悠「ちょっと！」

十和子「（日向に）家に入ってなさい」

小さく頷く日向。

日向「お母さん、学校で作ったんだ」

手にしていた

カーネーションを環に

差し出す日向。

日向「『母の日』だから」

環「（受け取り）ありがとう」

日向は玄関の向こうへ

駆け足で消えていく。

美悠「あ、日向！」

十和子「（唐突に）何しに来たの？」

美悠「は？ちよつと近くまで

来たもんだから、日向の顔でも

見てこうと思っただけ」

十和子「四国からこんなところまで。

あなたに何の用が

あるって言うの？」

美悠「（ムツとして）アタシに

だって、色々用事はあるから」

十和子「用事って？刑務所にいる男に

会いに？」

美悠「！」

戸惑う環が

十和子に目をやる。

環 「刑務所？この人、

お義母さんご存じなんですか？」

十和子 「ええ。祥吾の前の嫁の妹よ。

定職にもつかない放蕩娘」

環 「え？」

十和子 「祥吾が前の嫁と結婚

するときに、向こうの家族や

交友関係を興信所で色々調べて

貰ったの。

この女はロクに働きもせず、

怪しい事業やってる男と

付き合ってたのよ」

美 悠 「・・・」

十和子 「この女の姉との結婚、

私は反対したけど

当時の祥吾は聞かなかった。

渋々結婚を許してしまったわ」

美 悠 「・・・」

十和子「けど、やっぱり大失敗。」

嫁に来たって祥吾や日向の

面倒も見なかったのよ」

美 悠「あんた、ふざけんなよ！

姉ちゃんは身体が

弱かったからー」

十和子「ふざけんな？ふざけてんのは

そっちでしょ？

あなたの男は巨額の詐欺で

半年前に捕まったのよね？」

美 悠「！」

十和子「男の名前を覚えてたから、

ニュース見てすぐ分かったわ。

身内にそんな犯罪者がいる事を

快く思う人間がいると思う？」

美 悠「・・・あ、あんな男とは

もうとっくに別れたよ！

一切関係ないから！！」

十和子「（遮り）ちょっと待って。

あなたがいるって事はまさかー」

美 悠「……」

辺りを見る十和子の

目が留まる。

十和子「(溜息) やっぱり」

こちらをジッと

見ている美青を

嫌悪の目で見る十和子。

十和子「(美悠に) 何の連絡も無しに

いきなり何なの？ 帰って」

美 悠「と、突然来たのは謝るけど、

時間が無かったから」

十和子「時間？ 何の？」

美 悠「……」

十和子「あそこで突っ立ってる

お姉さんに伝えてくれる？

子供の面倒も満足に

見れなかった、あなたは

母親失格だって」

美 悠「！！」

十和子「だから、もう日向の事は

忘れる様になってね」

美 悠 「……」

十和子 「（環に）さ。行きましょ」

環 「は、はい」

玄関に向かう

十和子と環。

美 悠 「……謝りなよ」

立ち止まる十和子と環。

十和子 「え？」

美 悠 「私の事は何言ったっていい。

けど、姉ちゃんを

バカにするな！」

物凄い形相で十和子を

睨みつける美悠。

十和子 「（たじろぎ）な、何なの、

あなた？」

美 悠 「忘れようとして

忘れられるなら、私だって

そうして欲しい！

けど、姉ちゃんは

忘れたくないのに

忘れちゃうしかないんだ！！」

呆気にとられる

十和子と環。

美 悠 「なんで！？なんで

姉ちゃんばかりがこんな目に

遭わなきゃいけないんだ！！」

十和子の胸倉を掴み、

詰め寄る美悠。

美 悠 「謝れ！謝れ！！

姉ちゃんに謝れ！！！」

十和子 「ちょ、ちよっと！

環さん、警察呼んで！」

環 「は、はい！」

慌てて玄関に向かう環。

と、玄関ドアが開き、

日向が現れる。

美 悠 「？」

十和子・環 「日向？」

美青に向かい駆け出す

日向。

十和子「日向！」

美悠「？」

美青と対峙する日向。

美青「？」

日向「すみません。あなたの事

おとうさんから

聞いてるんだけど

覚えてないんです」

美青「……」

美悠「日向！」

日向「あなたは僕を

捨てたんですよね？

おばあちゃんが言ってました」

美青「……」

美悠「！日向！違う！！」

十和子をキッと睨む美悠。

十和子「（たじろいで）」

ジッと見合う美青と日向。

日向「今のおかあさんも、

おばあちゃんも僕を大切に
してくれています」

美青「（戸惑い）」

美悠「日向！違うんだって！！」

美青「えくと・・・」

美悠「？」

自分が手にした包みに
気付く美青。

包みを開くとイルカの
アクセサリが。

美青「（見て）これ、あげる」

美悠「？」

日向にアクセサリを
手渡す美青。

日向「・・・これ」

日向がお返しとばかりに
2つ折りのカードを

美青に差し出す。

美青「・・・ありがとう」

日向「・・・」

踵を返すと

駆け戻ってくる日向。

そのまま、何も言わず

玄関の向こうに

消えて行く。

美悠「！日向！！待ちなっ！」

十和子「・・・もう充分でしょ？

さあ、帰って頂戴」

美悠「・・・」

悔しくて、やるせない

表情の美悠。

S
29
同 傍

美青の元へ戻ってくる

美悠。

美悠「・・・何なんだよ、

せっかく来たったのに」

美青「・・・」

美悠「日向も日向だ。あのガキ、

あんな鬼ババの言いなりに
なってさ。もう甥っ子でも
何でもないっての」

不満げな美悠を

見つめる、無表情の美青。

美悠「？姉ちゃん？」

美青「今の子、可愛らしいね。」

えいと、み、み・・・」

美悠「・・・アタシは美悠だよ、

お姉ちゃん」

美青「そうだ。美悠、ごめんなさい。

あの子、あなたの知り合い？」

肩を震わす美悠。

美悠「・・・そ。行こうか」

美青の肩を抱き、

歩き出す美悠。

そこへ、自転車に

乗った中年男が

同じく自転車に跨った

制服警官②を引き連れ

現れる。

中年男「あ！あの2人ですよ！

車捨ててったのは！！」

美悠「・・・」

S 3 0 道 * 時間経過

ミニバンの元へ

レッカー車がやってくる。

自棄気味にアップルパイ

を貪りながら制服警官②

に説教される美悠。

美青はその傍で

訳が分からず立っている。

S 3 1 修理工場 * 時間経過

ミニバンのタイヤ

交換作業が行われている。

S
3
2 同 近く 海沿いの道

ベンチに座り、

財布の中身を見る美悠。

美 悠「あちゃあ、幾ら

掛かるんだろ？母ちゃん

金貸してくれるかな？ねえ？」

美 青「？えいと、ごめんなさい。

また名前が……」

美 悠「美悠……」

あ。そういえば、

あのガキがくれた

そのカード何？」

美青が手にした、

カードに目をやる美悠。

美 青「（首を傾げ）」

美 悠「見て見なよ」

美 青「……」

戸惑いながら

2つ折りのカードを

開く美青。

美 悠 「（見て）！」

カードには、

『ほんとうのおかあさん

うんでくれてありがとう』

とある。

美 悠 「……日向のヤツ、

急いで書いたんだ」

カードを見つめる

美青の目から

涙が一筋流れる。

美 悠 「！」

美青の指がたどたどしく

カードをなぞる。

美 青 「（微笑んで）」

美 悠 「……日向に

当たったりして、アタシ馬鹿だ」

自分のお腹に

目をやる美悠。

美 悠 「車、直ったら帰ろう。ね？」

2人の向こう、広く青い
海が広がっている。

S 3 3 介護施設 外観 *数か月後

S 3 4 同一室

車椅子に座り、虚ろな顔
でスマホを見ている美青。

美 青「……」

美青の指が、（無意識に）
画面の日向をなぞる。

美 青「……」

そこへ美悠がやってくる。

美 悠「よっ。元気？」

美 青「……」

美悠の胸には可愛らしい
赤ん坊が抱かれている。

美 青「（微かに笑って）」

美 悠「（笑って）」

壁のボードには、
日向からのカードや
美青が撮った幾つもの
思い出の写真が。

(終)